



〈参考資料〉古代の里と村[地域の歴史の見方 古代] (第5回「まちづくり地域歴史遺産活用講座」試行プログラム(2011.9.18-19実施)テキスト)

坂江, 渉

(Citation)

地域歴史文化の育成支援拠点としての国公立大学 : 地域歴史遺産の保全・活用と防災, 平成23年度特別研究プロジェクト 国公立大学フォーラム:67-72

(Issue Date)

2011-12-11

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003732>



古代の里と村

はじめに

▼日本列島上の古代史

□ 3 世紀後半以降の古墳時代（前方後円墳）・・・ヤマト王権による長い地域統合の時代

・ 6 世紀前半（継体朝）・・・世襲王権の確立、権力の専制化

・ 7 世紀初頭（推古朝）前後・・・中華思想の輸入

□ 7 世紀末～ 8 世紀・・・律令制にもとづく国家形成

・ 全国一律の造籍にもとづく一元的な公民支配（中央集権化の完成）

→この時代の地域社会の成り立ちをどのように見たらよいか

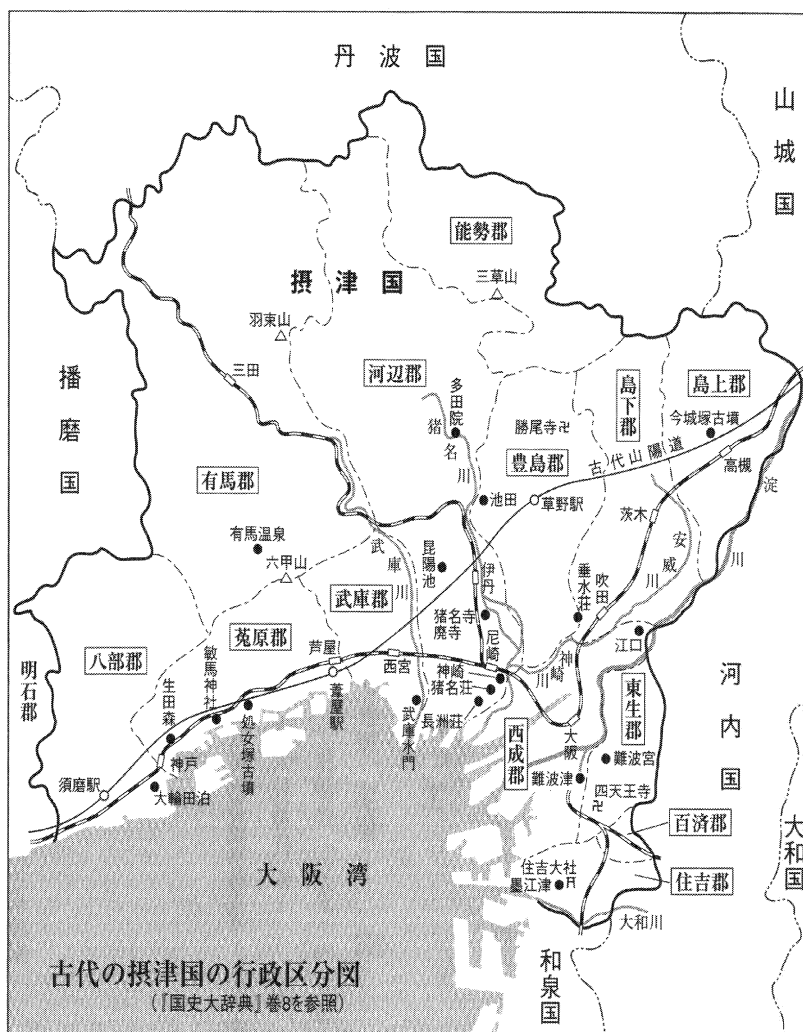
→当時の地方制度と実態の両面から考える

一、律令制下の摂津国と郡・里

▼律令制下の地方制度（8 世紀以降）・・・国一郡一里制度

□ 60 ヶ国以上の国（クニ）。国司による統治。

・ 現在の兵庫県は 5 国から成り立つ（摂津・丹波・但馬・播磨・淡路国）。



・ 現在の神戸市域の大部分は摂津国。そのほか播磨国も。

▼郡について

□ 10 世紀前半の日本最初の百科辞書『倭名類聚抄』によると、摂津国は 13 郡あると書かれる。

□ ただし八部郡は、奈良時代には「荒田郡」→「雄伴郡」

▼各郡の下の「里」

□ 「里」は後に「郷」と記されるようになるが、1 里（1 郷）は 50 戸で成り立つという原則。

↓（つまり）

▼ 古代の里（郷）は、人々の暮らしの単位でない。兵士徴発や租税取り立てのための人為的な組織。

□ 軍団の基本ユニットの「隊」は 50 人で編成

▼暮らしのまとまり（自然の村落）は、里の下にあった「村」

- ・通常は一つの里のもとに2～3の村あったらしい。
- ・菟原郡、八部郡（荒田郡、雄伴郡）などにどんな村があったかは不明
↓（ただし）

▼10世紀前半頃の郷についてはある程度判明

（『倭名類聚抄』巻6の郡別郷名〈元和3年古活字版20巻本〉）

□河辺郡8郷、武庫郡8郷、有馬郡5郷、菟原郡8郷、八田部郡5郷

（cf）江戸時代の村の数

二、自然村落としての村の人口

▼古代の村の人口

- ・奈良の正倉院の8世紀代の戸籍データにもとづく推定
戸籍・・・戸主名を筆頭にして戸口姓名・性別・続柄・年齢等を記述
一戸あたりの平均戸口数21.4人・・・傍系親族のイトコ・ハトコが同一戸内に編籍
↓（五十戸一里制）
- ・一里あたりの平均人数＝1070人。一つの村の推定人口は、平均350人前後。
（ex）武庫郡・菟原郡8郷・・・約8500人、八田部郡5郷・・・約5000人
諸国全体・・・約450万人の推定人口。

三、暮らしと生活環境

▼村人たちの生業は農耕（米作り）が中心。ただし生活・生産条件はかなり不安定で劣悪。

□死亡時期の季節性の研究（田村憲美・藤木久志・今津勝紀氏）

「人が多く亡くなる時期」・・・旧暦の春～初夏の頃に集中（食糧難・餓死者）

弘仁10年（819）の太政官符「夏時に至りて必ず飢饉あり」→「夏乏」対策として麦の栽培を奨励

□日本の古代～中世・・・慢性的な飢饉と農業危機、疫病の蔓延する時代

▼古代の人々の平均寿命

□大宝2年（702）御野国加毛郡半布里の戸籍研究（W.Farris）・・・1119人分のデータ

男32.5歳、女27.75歳。大部分は40歳代で死亡。乳幼児の死亡率は50%以上。

1000人あたりの出生率は50人、死亡率は40人、成長率は10人

□人口構成は典型的なピラミッド型。現在と正反対の「多産多死型社会」

▼過酷な生活環境のもとで重んじられたもの→2つの「生」

①生産（米作り）の維持、再生産

→現存する各国風土記の神話、説話・・・食べ物（飯）に関する話の多さ

→そのための共同の神祭り・・・豊作祈願（村を単位にして）

②生殖（婚姻と出産）＝人口の維持への関心

- ・古代の平均初婚年齢・・・15歳前後

（cf）養老令聴婚嫁条「凡そ男年十五、女十三以上、婚嫁を聴す」

- ・女性は「命ある限り子供を産み続ける状態」

↓（ただし）

□配偶関係は決して安定的ではない（配偶者を失う男女の発生が多さ）

- ・結婚適齢期の男女の結婚や、配偶者を失った者の再婚（再々婚）を奨励する共同体行事の開催（歌垣）
- ・歌垣では、若い男女のみならず、村の老人たちも参加して歌の席に立つ。
- ・若者たちを叱咤激励する歌＋教訓の歌（経験を語る）

おわりに

▼律令体制を崩壊させたもの

□8世紀末～9世紀以降の地方で台頭してきた「富豪之輩」（富豪浪人層）

自ら武装集団化して（党をなす）各国の国衙役人に対抗。

延喜2年（902）の播磨国：「動もすれば群党を招き、ほしいままに濫悪をなす」

律令国家の財政基盤の崩壊へ。その一方で富豪層は、落ちぶれた公民層を庇護化におく

↓

□中世の領主制（荘園公領体制）へ

河内國郡府在志紀管十四田三萬八千四百	段百六十步正公各十九萬八千九百四	七十六束雜稻錦部爾之石川加波	十六萬二束稻	古市知不留安宿加須大縣於多高安加多	夜河内名與國讚良佐良茨田多萬年交野	須加多若江和加	乃知比為丹	南為丹北	和泉國日靈龜在和泉郡行程上二日下一	此兩郡置管三田二千五百六十九町二	千五百七	大鳥止利保和泉國分置	日根比	攝津國延曆十三年管十三田二萬二千五	本稻四十八萬正公各十八萬五千束	住吉與之三濟良久太東生比年我西生	途之島上志末乃島下准豐島手河邊	奈里島加美乃	加波武庫無兔原良宇波八部夜多有馬	乃倍乃	萬利能勢乃	東海郡第六十一
--------------------	------------------	----------------	--------	-------------------	-------------------	---------	-------	------	-------------------	------------------	------	------------	-----	-------------------	-----------------	------------------	-----------------	--------	------------------	-----	-------	---------

坂本佐加池田多介山直多倍八木	掃守毛加余木島之末	日根郡	近義賀美呼喚手鳥取止々	攝津國第七十二	住吉郡	住道須無大羅於保與杭全多末餘戶	榎津豆	百濟郡	東部南部西部	東生郡	古市智不留郡家酒人味原餘戶	西成郡	長源安良伏見布之槻本都木乃	郡家宅美讚楊雄惟三野	津守驛家餘戶	島上郡	濃味兒屋真上美末加服部波止
----------------	-----------	-----	-------------	---------	-----	-----------------	-----	-----	--------	-----	---------------	-----	---------------	------------	--------	-----	---------------

高上	島下郡	新野 通比	宿人	安威 井	穗積 保都
豐島郡	秦上	秦下	驛家	豐島 天之	餘戶
桑津 久波	大明 阿介	河邊郡	雄家 倍乎	山本 屯止	爲奈郡家
楊津 也奈	餘戶	大神 無知	雄上	武庫郡	賀美
會彌	津門 止都	廣田 比呂	雄田 多乎	武庫 無古	石井 以之
有馬郡	春木 波留	幡多 變多在	羽東 波都	大神	忍壁 於之加倍
鬼原郡	賀美	鞆原	布敷	津守	天城
覺美	佐才	住吉			

八田部郡	生田 以久	宇治	神戶	八部 也多
長田 奈加	能勢郡	能勢	雄村 乎無	枳根 子木
伊賀國第七十三	阿拜郡	枯殖	川合	印代
新居	服部	三田	山田郡	木代
伊賀郡	阿保	阿我	神戶	猪田
大内	長田	名張郡	周知	名張 奈波
夏身	伊勢國第七十四	桑名郡		

英多安伊勝田萬加豆苦田西有東苦田西	國管七田六萬千二一町三萬二千五	美作國日府在苦東郡行上七郡下四	波神埼佐加無多可賀茂美囊木奈	府揖保伊比赤穗賀古印南美奈	東明石志安加賀古印南美奈	萬東本額百三十二萬東雜額三十四	十四町三萬二千五	播磨國府在磨郡行管十二田二萬	山陽郡第六十五
知夫海部周吉隱地	東公四萬東本額七萬東雜額二萬	隱岐國府在周吉郡行上管四百八	鹿足阿乃美濃	東千安濃邇摩那賀邑知保	萬千東本額三十九萬千東雜額八萬	石見國府在那賀郡行上管六田八	止飯石伊比仁多爾以大原波良	福秋鹿安伊楮縫多天出雲神門無	

印南郡	望理	賀古郡	邑美	葛江	明石郡	播磨國第百十一	隱地郡	都麻	河內	武良
	長田		垂見	明石	住吉		奄可	海部	佐作	
	太奈加		美多留	之安加	須美		加安無	未安		
	住吉		神戶	住吉	神戶		新野			
	與之			與之			乃余比			
	餘戶									